



(注) 2人以上写っている写真は最初の名前の人が左側です。

年男・年女20人が語る 今年の抱負・目標

うま 村の午年生まれば282人



さわぐち づみ・よし かつひこ
澤口いづみ・ヨシ和彦さん
(上区・35歳、59歳、35歳)

一家に午年が3人です。何事もうまくいくようにと願掛けしました。健康で、家族全員が無事に過ごせますように。



こまき たき みつひで
駒木タキ・満英さん
(黒崎・83歳、35歳)

病気をしないで元気に、家族ともども楽しく暮らす1年にしたいと思っています。家族全員、今年以上に頑張ります。



すだり え ひろかず
須田理絵・浩知さん
(白井・23歳、23歳)

5月に家族が一人増え、3人になります。私たち夫婦は午年生まれで、子どもも午年です。馬が合うと思います。



かね こたつ やすお
金子達哉くん・恭男さん
(黒崎・11歳、47歳)

スポ少でレギュラーになれるよう頑張ります。家族がお互いを大切に、健康で楽しく過ごしたいですね。

その国や地域に大昔からいる馬を「在来馬」と呼びますが、日本では現在、北海道、長野、宮崎、沖縄などに計八種類がいます。これらの馬の祖先が、いつごろ、どういうルートで日本列島に渡ってきたのかは、まだはっきり分かっていません。しかし、縄文・弥生時代には役割ははっきりしないながら、馬がすでに家畜のように利用されていたようです。古墳時代の遺跡からは埴輪も出土しています。馬は、古典にもしばしば登場します。最古の歌

祖先のルートはどこ？ 在来馬・日本に八種類

「馬に乗ってみる人には添ってみる」「馬の背をわける」「牛馬の目を抜く」…。馬に関する慣用語や諺は数知れません。馬がいかに人と深くかわって来たかがつかわれます。馬が最初に家畜化されたのは、今から五千年ほど前の中央アジアのこと。以来、人や荷を運んだり、物をひっぱったり、農耕を助けたり、戦場で働いたり、さまざまな場面で大きな役割を果たしてきました。

新世紀二年目の今年は、十二支の七番目の午年です。午は真南の方角で「午の刻」といえば、午前十一時ごろを指します。

人と馬のつきあいは 大昔、五千年前から

集といわれる「万葉集」には、馬を詠んだ歌が八十首近くあり、馬が貴重であったことが読み取れます。

勇姿「走る芸術品」 馬耳東風など馬迷惑

馬と聞くと真っ先に競馬を連想される方も多いと思います。馬同士を走り競わせる行事は、走馬、競馬などといって、奈良時代から行われていました。特に端午の節句(五月五日)の競馬は、恒例で時の天皇が臨観したとの記録が残っています。

現代では、競馬といえばサラブレッド。より速く走るようにと、品種改良を重ねてつくりあげられた馬です。広い胸幅、よく発達した後駆、四百キロを超す体を支える細い脚。たてがみをなびかせて走る姿は、「走る芸術品」といわれるだけあって、ほればれとする美しさです。

一方で、「馬の耳に念仏」「馬耳東風」と、無反応、役立たずの代表のようにいわれる馬の耳。私たちが何気なく使ってしまう諺ですが、これは誤解と考えてよさそうです。

馬の耳は、前方にある物の距離を測るなど、優れた機能を持っています。「馬の耳に念仏」悠然とした馬の姿から連想された物なのでしょうが、馬にとっては迷惑な話ですね。

神への祈願成就には 絵馬・木馬を献納